慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	カブールの後半生
Sub Title	
Author	高橋, 誠一郎
Publisher	三田学会
Publication year	1910
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.3, No.2 (1910. 2) ,p.201(91)- 212(102)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19100215-0091

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

年外交上に經驗も手腕もあるビユーローが此際引くに引かれなかつたのと今一ッは昨年の議會に多年の宿題であつた五億麻克の大增稅案が現はる計畫で有つたので此大難關を切り拔けるにはやはりビユーローの手腕を羨たざるを得なかつたので皇帝は之を理由としてビユーローを引き止めビユーローも亦其やり掛けた二個の仕事を成就して目出度懸冠し樣と欲し遂にセルビア問題の落着と增稅案の通過とを期限として留任の約束が成立したのである、而してセルビア問題も彼の思ふが儘に解決を遂げた、增稅案も曲りなりにも成立した、況んや十年の長年月顯職に座するを得て位人臣を極めたのだから何も此上宰相の地位に戀々たる必要は無いのであるいざさらば去らん哉、北海の孤島ノルダーネーの別墅は頻りに彼の心を引く、羅馬駐紮時代に望なき望を掛けて遂に贏ち得たる今日のビユーロー夫人は今も彼の愛重措かざる所にして共に靜かに音樂を談じ古詩を談ぜんとは豫て彼の希望したる所であつた、ビユーロー公の最後を以て失敗の歷史を殘したりと論ずるは余の與せざる所である。

カヴールの後半世

高橋誠一郎

（四）巴里會議

巴里會議は今や解散せられんとす、平和條約は既に調印を終れり、最早何等の議す可きものなきに似たり。然れども議す可きの問題は盡きたるが如くにして尙ほ未だ盡きず、否な少くともカヴールに取りては一大問題の論ぜられずして殘れるあり。此會議の議事に際してはカヴールは初めより多くを談らず、自國に直接の利害關係を有せざる諸般の問題に關しては寸毫も喙を容るゝことをなさず、彼は此點に於て殊に露國の歡心を買ふを得たり。然れども彼は終に沈默を破らざる可らず、而して特に列席せる列國使臣中其一人に對して其鋒芒を試みざる可らざるなり。

カヴールはこれより前き三月二十七日佛國外相にして此回の平和會議々長たる伯爵ワルウスキー（Walewski）に一書を裁して佛墺二國の兵が法王領を占領するは全伊太利をして現今の苦境に立たしむるの根本原因たるを論難し更に歩を進めて、伊太利に新に革命の起るを豫防せんと欲せば須く先づ十九世紀の新思想を固陋なる法王領內に移入せしめて以て行政事務に改良を加へ、ナポレオン法典を施行すべく、而して法王を中心として宗教を離れたる自治の政府を建設せざる可らずと說けり。是れ素より佛國が自ら謂はんとする所なり。八月八日ワルウスキーは突如として列國會議に向つて希臘國內に於ける英佛二國の撤兵を主張し、且つ其內政改革の方法を議定せんとせり、彼は同一の論法を以て法王領內の現狀に論及し此に於ても亦墺佛撤兵の必要を說き、更に進んで伊太利全土の失政に及び、殊にネープルス王の專制橫暴を論難し本會議に列したる諸國は此等の君主に對して宜しく其反省を促さしめざる可らずと說きたり。此伊太利問題の討議に當りては英の全權クラレンドン（LordClarenddon）コウレー等はピエモンを助けて佛に同意し、露のオルルッフ公並にブ

リユノーは昔の全權と共に頗る曖昧なる態度を以て之れに對せり。獨り墺のブヲール(Buol)及びヒユーブネルは佛の提議が自國の政策に反する旨を論じ、併せて本會議は斯の如き問題を議定するの權能を有せざるものなりと論せり。然れども法王領の撤兵に關して流石に異議なき旨を言明せり。かくて伊太利問題は漸く列强の注意の中心とならんとす。カヴールが沈默を破る可きの時は當に來れるなり。

列國會議閉會の當日（閉會の當日とは卽四月八日にして前に記せると同日の議事なるなり別の日と思ふ可らず）カヴールは列國全權の前に立ち、其滿腔の熱血を傾注して伊太利問題を論究せり。彼は先づ伊太利半島の不健全なる狀態を說明し（彼の所謂"The utterly abnormal state of Italy)、其病根は反動政策と外國兵の占領にありとなし、ロンバルジー(Lombardy)ベネチア(Venetia)の悲境を述べて墺太利の暴虐に移り「墺太利は初めより伊太利の病患を療醫するの意なき」ものとなし、革命は蓋し避く可らざる自然の結果なりと叫び、墺は自ら「維納條約の定めたる半島の均勢を破壞」するものにしてピエモンは常に其脅嚇を受け、其局「多年の間、巨萬の財を費して大に兵備を嚴にし、以て不時の變に備ふるの已むを得ざるに至らしめたり」となし、最後にネープルス、シシリー(The Kingdom of the Two Sicilies)に於ける武斷政治の餘弊極まる所なきを說き、墺を逐ふにあらざれば半島の民族をして其堵に安んぜしむると能はずと論斷せり。英のクラレンドン卿は大なる同情を以て此れを迎へたり。墺を除くの外何れも皆敢て反對を挾むものあらざりき。彼は素より此會議の結果として有形なる何物をも得る能はざりしと雖も、然も彼が當初より期待し得たるものは悉く之を收め得たり。彼は全歐に向つて、永く解決せられずして殘れる伊太利問題あることを覺知せしめたり、彼は墺太利をして全く孤立無援の地に立たしめたり、而して彼は又ピエモンを伊太利の自由伊太利民族統一に於ける大チヤンピオンとして推進せしめたり。嗚呼彼れ更に何者をか望まんや。卽ち彼が歸國の後(五月六日)ピエモン議會に於てなしたる演說は最も克く其胸中を披瀝したるものなりき。曰く、「ピエモンがクリミヤ戰爭に關與したるによりて得たる利得は現時に於てこそ擧げて數ふるに足らずと雖も、其費したる貨財と其注ぎたる血とは決して無用に歸す可きものにあらざる可し」と、後世史家がクリミヤ戰に於ける第一の勝利者は英にあらず佛にあらず、ピエモン及び普魯西なりとなせるもの亦失當の言にあらざるなり。

（五） プロンビエル(Plombieres)の密會

巴里會議後に於けるカヴールの地位は頗る其强固の度を加へたり。然も彼は徹頭徹尾立憲國の宰相たるの態度を變せざりき。首都チユリンの士人は常に謂へり「余等は內閣を有し議會を有し憲法を有す、而して總て此等のものはカヴールなる文字を綴るなり」と。彼は常に政治上經濟上敎育上の三方面に向つて其明晰なる頭腦と敏活なる手腕とを働かせつゝありしなり。彼は大なる尊敬を議會に拂へり、而して議會は亦大なる信認を以て彼に答へたり。彼は尙ほ革命の餘毒を消さんとて、專ら其精力を經濟上財政上の進步に注ぎたり。課稅の重きを加ふるは素より事情已むを得ざるに出でたるものなるを以て、彼は通商條約、鐵道布設、公機關の設置等によりて國家の富源を增進し、以て其負擔を輕減せしめんとせり。同時にラ、マルモラは軍隊改造を續行し、スペンジヤ(Spenzzia)には海軍造兵廠創設せられ、アレスサンドリヤの防備も亦全く整へり。然れども斯くの如き大營繕は固より無償を以て購ふこと能はざりき。カヴールは其施設の餘りに迅速なりしが爲め端なくも一般の非難を買ひ、一時は殆ど其名聲を失墜せんとせり、一八五七年の大選擧に於て彼の與黨は著しく其員數を減せり。然れども彼は泰然として動かず、飽くまでも其政綱を標榜して屈せざりき。而して次期の總選擧に入るの前に於て彼の政策は其第一の勝利を以て酬ひられたり。

外交上に於けるカヴールの苦心は更に其內政に於けるものよりも遙に甚しかりき。彼が巴里會議閉會の際、列國の代表者に與へて謂へる「革命的盲動によりて攪亂せられ、外にありては非常なる壓制と外敵の占領に惱まされ、墺太利の勢力增大によりて威迫せられつゝある吾がピエモンは、日ならずして其結果を豫見すること能はざるまでに極端なる手段を採るの止むなきに至る可し」との言は來る可き戰爭に對する豫言なりしと雖も、然もカヴールの政策は軍隊的なるよりは寧ろより多く外交的なり。伊太利軍隊の力のみを以て其獨立を得んと企てたるカルロアルベルト王が失敗の歷史は彼に敎ゆるに無援の伊太利は決して其希望を完成する所以の道にあらざるを以てせり。斯く彼は自國の地位を自覺しつゝ、切に英佛の同情を求めて以て他日の用に供せんとせり、遮莫彼は眼中唯だ英佛あるを知つて他を顧みざるが如き愚を演ずるものにあらず、彼が用意は何處までも綿密なり周到なり、彼は常に全歐の同情を買はんとして

努力せり、巴里會議中に於ても其後に於ても彼は露の好意を求めんとして苦慮したり、普に對しては露に對すると同一なる成功を見る能はざりしと雖も、當時尙ほ躊躇の時代に彷徨しつゝありし同國よりして中立を贏ち得たるは兎に角成功と謂はざるを得ざるなり。

然りと雖もカヴールは其多年渴望せる有力なる同盟を得んが爲めには尙ほ多大なる困難を冒さゞるを得ざりき。英吉利は由來同情及び精神的援助を與ふるに於て頗る贅なりと雖も其好意を進めて實質的援助を與ふるに就きては最も吝なるものなり、一八五七年の場合の如きは蓋し極めて稀有なる例外に屬す。故に彼は其外交が細心なりと謂はんよりは寧ろ急提に過るものあるの非難を免れざりしまでに佛蘭西の實質的同盟を得んとして焦りたり、彼は實に如何なる犧牲を敢てしても先づ佛の同盟を得ざる可らずと思惟せり。而して其一方に於て此に對するナポレオン三世の態度は如何なりしぞ。吾人をして少しく彼が心裡解剖を行はしめよ。

ナポレオンは恒に茫漠たる空想界に生活しつゝあるの人物なり、而して彼の腦裡に描かれたる空想世界は、之に到達すべき手段方法の階梯を缺けるものなりき。彼は只だ折に觸れ、興に乘じて漫然其實行を期畫するに過ぎず。彼は各國民の獨立を扶植して其民族的統一を計るを以て目的とせり、彼は一八一五年の維也納條約に對して滿足を表するものにあらず、切に之を破却して歐洲の地圖を改造せんとを願へり、彼は佛の領土を擴張して大ナポレヲンの鴻業を再興し、以て全羅典民族を統一せんとせり。然れども彼は此等の大目的を遂行すべき、確固たる意思、冷靜なる判斷、明快なる觀察等に至つては悉く皆之を缺けり。而して之に代ゆるに權變極りなき術策、撞着矛盾せる政綱、顚動せる精神を以てせり。遮莫偶然か、天與か、彼は多少の成功を常に收めつゝクリミヤ戰爭に及べり、クリミヤ戰爭は兎にも角にも彼にとりては大なる成功なりき、列國會議は彼の膝下に、彼の外相を中心として開會せられ、列國の使臣は皆彼の鼻息を窺へるなりき。一度徵發せられたる野心は大打擊に遭遇するにあらざれば容易に停止する所を知らず、新なる戰爭を生み出すものは由來戰爭の通態なり。彼は其名譽心を滿足せしめ得べきの地を求めて伊太利半島を得たり、半島は曾て彼の祖先を出したるの地、殊に其昔青年の意氣抑へ難くネープルスの獨立軍に加擔し、一敗地にまみれて兄は屍を戰場に殘し、彼も亦疲憊困頓、數度か圍圍の人とならんとして危くも母ボルチンスに助けられ、復も佛都に奔竄せる悲しき記憶は彼に於て尙ほ新なり。懷舊の情は化して伊太利の獨立に對する同情となれるなり。加ふるに一八四八、九年に於ける半島革命の亂に與したる公爵カニノー兄弟を初めとして彼の親族中には多くの伊太利人を有し、殊に彼が親愛せる從弟ナポレオン親王（Prince Jerome Napoleon）は其革命を喜ぶの念と、自己の利益心とに驅られ、常に彼が側にあつて伊太利援助のことを說きぬ、況んや一方には兇猛なる伊太

利の刺客は前年羅馬征討以來絶えず其頭上に白刃を擬しつゝあり、他方には怪傑カヴールが其蜜の如き甘き舌を延して利益と名譽と正義の三道より次第々々に彼を魅らせつゝあるに於てをや。

然れども彼をして決然意を決して伊太利獨立の爲めに立たしむるには猶ほ三個の障害を排せざるを得ざりき。第一に伊太利の革命を成就せんとせば勢已むを得ず羅馬法王の政權を削弱せざる可らず、是れ實に彼に於て最も忍びざる所なり。刑餘の一布衣ルヰ、ナポレオンをして佛國皇帝の高きに登らしめたるものは蓋し熱心なる舊教徒にあらずして何ぞ、彼は此舊徒の怨を買ふて何處に立脚の地を求めんや。第二は後宮内に於ける反對なり、皇妃ユーゼニーは有名なる宗教惑溺者にして法王を崇拜する神の如く、加ふるに平常ナポレヲン親王と宮廷に於ける勢力を爭ひ其獻策を排するは自己の權力を增大する所以なりと信せり。第三は閣臣の反對なり。接隣の地に強國を建設するの不利なるは、識者を待つて初めて知る可きことにあらず、外相ワルウスキー以下皆熱心に之を諫止せんとせり。ナポレヲンは如何にもして此等の反對者にも相當の滿足を與へ、併て彼と彼の國民とが熱心に希望しつゝある "gloire" を得んかと窃に思ひ惑へるなりき。

躊躇の中に一八五七年は暮れたり。ニユー、シヤテル事件もダニーブ二州問題も今は彼を煩はすことなきに至りぬ。然るに之に引きかへて伊太利半島の風雲は次第に其急を告げて、性急なる共和黨は彼方此方に劍を磨し初めたり。暴動一揆は今や到る所に蜂起せり。其狀態を指しつゝカーヴルは冷かにナポレヲンに向つて謂へり、「陛下は尙ほ遲疑し給ふや、民主主義は今アルプス山を踰へんとするなり」。

不思議なる事件は不思議なる結果を伴へり。一八五八年一月十四日ナポレヲン皇帝は皇妃と同乘して巴里の劇場に赴くの途次伊太利共和黨の亡命客オルシニー (Orsini) の襲擊する所となれり。而して此近臣十人を殺し百六十人を傷けたる恐しき

迷濛たる煙の内に彌よナポレヲンが決心をなすの緒を發したるなり。

ナポレヲンは固より一時非常なる激憤を發したり。彼は國内に峻嚴なる治安法を發布し、英に向つては其革命黨員を遇すること餘りに寛に失するを詰り、ピエモンに對しては言論欽制、陰謀取締に關する法案の提出を求めたり。此に對して佛國民は再び禁壓時代の現出を見るに至らんと戰慄し、英吉利は其不遜の態度を憤りて親佛主義のパルマーストン其職を逐はれ、ピエモンは其要求を容れて一八五八年二月の法案を通過せるも、然もカヴールは尙ほ毅然として一獨立國の大臣たる態度を保ち安りに彼の前に首を屈するものにあらざるを示せり。オルシニーは將に斷頭臺の露と消えんとして萬斛の血涙を一管の筆に込め、書をナポレヲンに贈りて其切なる衷情を陳せり。「願はくば吾が祖國憐む可き伊太利を救ひて其自由を恢復せしめよ、半島二千百萬の蒼生は子々孫々に至るまで陛下の德を欲して止まざるべきなり」。此書に接して彼が恐怖心は一變して大なる自負心となれり。彼は直に此書を其機關「モニツール」新聞に掲げしめたり。オルシニーは再び書を贈れり、曰く「余は今や甘んじて死せんとす、伊太利に對する陛下の深厚なる同情は吾が同胞をして再び陛下に兇惡の手を加へざるべし、彼等は此斷頭臺に登らんとしつゝある一愛國者が其殉國の誠忠によりて陛下を動し、伊太利の獨立と自由と祖先の光榮とを回復し得べきを知るに至る可ければなり」と。此第二の書簡も亦公示せられたり。而して三月十三日オルシニーが從容として刑に着けるの時は既にナポレヲンの胸中には斷乎たる決心の存するありき。彼は窃に使を以て此二書をピエモン官報に掲載せんことを求めたるも、狡獪なるカヴールは革命黨に同情するの非難を避けて故らに一先づ之を拒み、更に佛國が公然書を送りて之を勸告するに及び初めて四月一日の紙上に公にし、併せて檄を飛ばして多年熱望せる時機が將に來らんとしつゝあるを告げぬ。

一八五八年五月以來カヴールは佛帝の密使を受くること屢々なりき。蓋し佛帝はナポレヲン親王の外、內閣大臣を初めとして其他何人にも知らしむることなく私かにカヴールを招きて締盟の條件を約定せんとするなり。カヴールは一日アルプル山に勝を探るを名として輕裝チエリンを出發せり。然れども彼は其途中に於て俄に路を轉じてボスジュ州の一小村落プロンビエールに入りぬ。此村落には佛國皇帝ナポレヲンが忍びて彼を待てる成り。震天動地の大事は往々和平靜寂の裡に於てなる。七月三十日綠滴るプローンビールの郊外を縫ふて悠々として進む一輛の馬車ありき。これぞナポレヲンとカヴールとを乘せたるものにして、佛蘭西ピエモン間の同盟條約は假令有形上の調印を終らざりしと雖も、明かに此時に於て相互の間に締結せられたるなり。條約の內容は素より秘中の秘、其內容を確知するに由なしと雖も大略、佛國はピエモンを助けて墺太利を逐ひ、ピエモンはロンバルド、ベネチヤを併せ、伊太利は「アルプスよりアドリアチック(Adriatic)まで自由たるべく」、佛蘭西は其報酬としてサボイ(Savoy)及びニース(Nice)を「再合同」すべく、尙ほ羅馬法王を名譽首長として伊太利聯邦を組織し、開戰の時機は佛蘭西に以て之を定む可く、ピエモンは佛が交戰の端を開くを待つて之に應ず可しと謂ふにありたるものゝ如し。斯くの如きもの素よりカヴールが好む所の條件にあらざるや明なりと雖も、然も彼は今に於に望む所のもの全部を得んとするは到底不可能たるを知れるなり、而して若し全きを得ずんば其一部をも辭せずとはカヴールの主義なり。彼は暫くサボイ及びニースを對價として伊太利統一を購はざる可らず。

カヴールは僅々二日にしてプロンビエールを去れり。然れども彼は直ちにピエモンに歸ることをなさず、更に道を普魯西に取りて、其意向を探らんとせり。時の攝政皇弟ウイリヤム(William)は最も多く彼のオルミュツ(Olumütz)の屈辱を慨ずるもの、時あらば一矢を墺太利に報ひんとは彼れが無言の眉宇に溢れたり。普魯西は事あるの日墺太利を援助するものにあらずとは彼の早くも觀破し得たる所なり。斯くしてカヴールは邦家の前途の上に溢るばかりの希望を湛へつゝチユーリン府に歸り着けり。

(六) 墺太利の最後通牒

一八五九年一月一日の初日の影は平和の光を齎さゞりき。「余は吾國の貴國政府に對する關係が從前の如く親善ならざるを遺憾とす。余は玆に貴下が貴國皇帝に對して余の陛下に對する個人的感情は毫も昔に變るとなきを告げられんとを希望するものなり」云々とは之れ實に佛帝が元旦の佳節に於て列國使臣の面前に於て墺太利の大使ヒユーブネル(Hübuner)に對して冷かに發したる不祥の言なりき、彼は明に墺を激せしめて、自ら戰に赴かしめんと企てつつあるなり。四月十日ピエモン王は議會の開院式に臨みて一場の演說を試みたり、曰く「新年の舞臺が開かれたる地平線は尙ほ未だ明確ならず……小なりと雖も吾が國は其表彰せる思想の宏大なると、其天下に向つて求めつつある同情の高尙なるの故を以て歐洲列國の會議を動かせり。然りと雖も吾が今日の地位は敢て危險なしと謂ふ可らず、何となれば吾人は一方に於ては條約を尊重すると雖も、亦他方に於ては伊太利の各地方より日々吾人の耳朶を打つ苦悶の叫聲(Grido di dolore)に對して耳を蔽ふこと能はざるなり、吾人は團結を强固にし、吾人の權利を自覺し、細心に而して大膽に、神の攝理の命ずる所に從つて進まざる可らざるなり」。王の此演說は大なる熱心を以て喝采せられたり、而して歐洲全土悉く皆之れを反響せり。戰爭は今や眼前にあり。墺太利は數個軍團の兵を送りてロンバルド、ベネチヤを固めたり、佛國及ピエモン亦公々然として開戰の用意をなせり。一八五九年二月七日カヴールは王國防備の費用として五千萬フランクを議會に於て議決せしめたり。

此間にナポレヲン三世の從弟ナポレヲン親王とビットリヲ、エマヌエルの王女クロチルダ(Princess

Clotilda) との婚儀は一月十八日に成立し、同三十日を以て擧行せられ、佛蘭西ピエモンの兩國は更に親密の度を加へたり。一月十八日墺にしてピエモンを襲はんか、佛は必ず之を援助すべしとの形式上の條約は締結せられたり。然れどもナポレヲンは尙ほ此秋に際しても其固有性たる遲疑逡巡を續けて常にカヴールが心勞の種を增せり。時に有力なる小冊子「ナポレヲン三世と伊太利」"Napoleon III et l'Italie" なる一書出版せられて歐洲を動かせり、此書の載する處は伊太利半島を以て聯邦組織となし、羅馬法王を以て名譽首長と仰ぎ、ピエモンをして實權を把握せしめざる可らずといふにありき。此書は素よりナポレヲンの意見を受けて起草せるもの、此に據るも彼が決心は當然牢固たるものあるべきに、然も彼は其最後の瞬間まで躊躇躊躇を重ねつゝあるなり。

墺は獨逸の各聯邦州に對して援助を求めたり。歐洲の外交界は將に墺佛兩强が干戈を交へんとするを見て之れが調停を試みんとしたり、殊に英國は此事件に關して重大なる關係を有ずるものなれば百方力を竭して事を平和の裡に落着せしめんとせり。佛蘭西と英吉利とは支那戰爭以來益々深厚なる關係を有するに至れる上、殊に印度に於ける關係上、英は佛の感情を害するとを好まざるものなり、然も他方に於て亦ナポレヲンをして伊太利半島に其飽くなきの野心を滿足せしむるは其克く忍び得る所にあらず。此に於てか英は先づロンバルデー及びベネチヤに於ける墺太利の施政改善、並に其中央伊太利に對する干涉廢棄を條件として爭議を調停せんとせり。墺太利は固より英の同情を買はんとして汲々たるもの、喜んで（少くとも表面上に於ては）其提議を容れたり。佛帝は心中窃に之を好まず、一世一代の智囊を搾りて英の斡旋を畫餅に歸せしめんとせり。卽ち三月上旬列國會議說を提出せる露帝アレキサンドル二世（Alexander II）は實に彼が繰れる絲に依つて動ける也。此提議に對し墺太利にして若し之を拒まんか彼は自ら好で戰端を開くの理なり、甘んじて會議に列

せんか佛露は相合して彼を壓せんとするなり、墺太利は當に此岐路に立てり、英吉利は不性無性三月二十一日之に列席するを諾せり。然れども未だ開會せざるに早く業に數多の困難なる問題は簇生し來れり。墺太利はピエモンの列國會議に列するを拒み、且つ曰くピエモンにして參列の權を得せしめんか、他の伊太利諸州をも悉く皆列席せしめざるを得ざるなりと。墺は尙ほ之に嫌らずして更にピエモンに大屈辱を加へんとし、同國に迫りて其軍備を撤せしめんとを主張せり。墺太利は今や步一步彼自身を死地に向つて導きつゝあるものなり、暗愚の君、凡庸の臣、彼等は復も渦中に向つて其舟を進めんとす。

然も英は飽くまでも平和に熱中せるもの、此墺の提案を折衷して墺太利、佛蘭西及びピエモン三國同時豫備撤兵說を提出し、併せてピエモンを列國會議より排斥するに同意せり。加之佛國の閣僚並に宮廷內にも尙ほ墺に同情してピエモンを會議より除かんとを希望するもの多く、切りにナポレヲンを說きてこれを動さんとせり。然れどもピエモンをして列席せしめざらんか折角ナポレヲンが肝膽を碎きたる名策も終に其效を奏せざるに至らん。彼は斷乎として之を肯かず、而してピエモンも亦列國會議に加はるを條件として英國の撤兵說に同意し、併せてカヴールに對しても亦之れが同意を促せり。ナポレヲンは獨り呑み込めり。彼は此會議に於て美事墺太利を屈服せしめて以て其勢威の大なるを誇らんとせり。然れども果して墺にして佛の要求を容れて暫く屈從せりとせんか、佛帝の名譽心は或は滿足しめらるゝを得べし、伊太利半島は終に浮ぶ瀨なくして終らんなり。カヴールは血涙を飮めり。嗚呼されど彼は獨力以て如何ともする能はず、終に泣く〳〵兵備撤去に贊したりき。

次で來る可きものは果して平和か。否、天は尙ほカヴール及び伊太利を棄てざりき。彼が平和を望まざるが如く、墺も亦之を望まざりき。突如として最後通牒は四月十九日維也納を發して四月二

十三日ピエモン政府の手に落ちたり。カヴールは之を握つて雀躍せり。書中には實に僅々三日の間に武裝解除をなす可き旨を要求せる傲慢なる文字の羅列せるありき。是れ實にカヴールが失望落膽の裡に已むなく相互撤兵案に同意すべきを宣告せるより僅に二日の後なりき。彼は卽ち四月二十六日を以て儼然として大なる "No" を墺太利に送れり。四月二十八日墺太利は宣戰を布告せり。翌二十九日墺兵終にチシノ(Ticino)を渡る。墺は大事を過てり。列國の同情は全く地を拂つて去れるなり。

墺太利は何の頼む所ありて戰を宣したる。蓋し獨逸聯邦の後援を信じて、敵の備へなきに乘せんとせるものなり。佛蘭西は獨乙民族の俱に天を戴く可らざるの敵なり。墺と佛と爭ふに際し袖手して之を傍觀するものは獨逸民族中の蠹毒なり、墺にして一度彼等の敵愾心を刺激せんか、彼等は先を爭ふて墺の後に從はん。英吉利は必ず好意的中立をなして陰に陽に墺を助けんとは墺の爲政家が外交界の皮相を窺ひて輕卒にも下したる推斷なりき。加之何處までもお人よしなる墺は敵の放てる流言に惑はされて佛の戰備を終らざるを確信し、先づ敵の機先を制して一擧に半島を蹂躙し盡さんとせるなり。

然れども其結果は如何、普魯西は曰く、墺は攻擊の地位を取れり。吾々聯邦は伊太利内の墺太利領を保護せんが爲めに墺太利を助くるの義務なしと。英吉利は曰く、維也納政府は英の後援又は同情を求むべき資格を喪失せりと。而して佛軍の先鋒は開戰と同時に肅々としてアルプス山を踰へたり。戰はずして勝敗の數既に定まれり。

（次號完結）

新著紹介

スタニユーエル氏英佛兩國公債比較論

C. A. Stanuell-British Consols and French Rentes pp 24. 1909. London P. S. King and Son. 6 d. net.

本書は僅に二十四頁を數ふるに過ぎざる片々たる小册子の如くなれども、其内容に至ては、大に見る可きものあり。蓋し英佛兩國財政の信用程度を考ふるに、英國が高きに居りて、佛國が低きに在るは、何人も想像に苦しまざる所なるに、兩國公債の時價と利率とを對照するときは、兩者の差頗る少なきを見る。スタニユーエル氏は之を説明して曰く

佛蘭西は英吉利よりも小國にして、英の人口四千百萬に對し、三千九百萬の人口を有するに止まり、其富源も英國に比較して劣る所あり。佛の公債現在高は十億磅、人口一人宛二十五磅なるに、英の公債現在高は七億五千萬磅にして、人口一人宛十八磅なり。佛は境界に於て他の强國と相接するに、英の境界は海に依て保護せらる。斯る狀況の下に於ては英國の公債は佛國の公債に比較し、少なくとも二割以上の市價を有す可き筈なるに、事實は此道理に反き、英の二分五厘利付公債の時價九十六に對し、佛の三分利付公債の時價八十四なり。換言すれば英は百磅の現金を要するに當り、百十九磅の公債を發行せざる可からざるに、佛は百四磅の公債を發行すれば可なり。然らば英は百磅に付き二磅十九志六片の利子を拂ひ、佛は三磅二志五片の利子を拂ふものにして、其差三志だけ英國に取て有利なるに過ぎざるなり。

然らば兩國公債の時價に斯る事實を生ずるに至れる原因如何。近年英國に於てコンソル公債時價